慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カフカ文学における女性の機能：『失踪者』再読
Sub Title	Funktion der Frauen in Kafkas Werken : Eine Re-Lektüre von ,,Der Verschollene"
Author	寺田, 雄介(Terada, Yusuke)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2007
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.24 (2007. 3) ,p.104- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20070331-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カフカ文学における女性の機能

——『失踪者』再読

寺田雄介

0　はじめに

「16歳のカール・ロスマンは、女中に誘惑されて子どもができてしまったので、貧しい両親によってアメリカへと送られたのだが…」[1)]という衝撃的な冒頭から始まる『失踪者』。もっとも、カフカの作品にはそれ以外にも数多の女性が登場し、主人公を誘惑する。長編小説だけを見ても『失踪者』のクラーラ、テレーゼ、ブルネルダ、『審判』のビュルストナー、廷丁の妻、レーニ、そして『城』のフリーダ、オルガ、アマーリアと枚挙に暇がない。ではなぜ、これほどまでに女性の存在にわれわれは目を奪われるのか。それは、たいそう薄弱な印象を受ける主人公たちに対して、彼らの前に立ちふさがる女性たちがあまりに突飛で、挑発的であり、不条理などと揶揄されるカフカの物語の中においてすら、なおいっそう違和感あふれる存在に他ならないからである。カフカはそれらの女性たちにどのような役割を担わせたかったのだろうか。そして、それはどうして女性でなくてはならなかったのか。本稿ではカフカが遺した三つの長編小説のうち『失踪者』に焦点を当てながら、カフカにおける女性像を探ることで、これらの問いに迫ってゆく。

『失踪者』は1912年に執筆されたカフカ最初の長編小説である。後に

---

1) Kafka, Franz: Der Verschollene. In: Franz Kafka Gesammelte Werke in zwölf Bänden. Bd.2. Fischer Taschenbuch Verlag. Frankfurt am Main. 1994. S.9.
なお、本稿ではカフカの既訳にこだわらず、引用に関しては全て訳出し直した。

執筆された『審判』と『城』が、その構成や世界観の類似性から並列的な評価を受けているのに対して、『失踪者』は両作品の萌芽に過ぎず、カフカの大きな特徴でもある夢のような表現技法にも乏しい、などと評されることも少なくない。それは『失踪者』全体に流れる楽観的な雰囲気や、間違いなくユートピアのモティーフであろうアメリカが作品の舞台となっていることだけに起因しているのではない。いずれヨーゼフ・K、そしてKと次第に名前を失い記号化してゆく主人公たちに比べ、『失踪者』のカール・ロスマンは明らかにもっとも誠実であり、純粋であり、そして、カフカ自身の表現を借りれば「罪なき者」[2)]なのである。他の二人の主人公たちと違って一切の暴力をふるわない。しかしまた、罪なきが故に彼は内的な力に身をゆだねる機会には恵まれない。常に外的な力によって彼の行動は決定され、その喜怒哀楽も他律的に操作され、そして彼を囲む物語の筋も否応なく進行してゆく。カールは周囲の環境に対して常に受動的である。言い換えれば、主人公の周囲に群がる女性たちのもつ影響力を調べるには、『失踪者』のカール・ロスマンは格好の対象になるというわけなのである。

1　カフカの作品と父権性

男性がもつ女性観と異性に対する関心は、その子ども時代にまずその母親のもとで育まれる。フロイト（Freud, Sigmund: 1856-1939）によれば、性本能の最初の対象は乳児の栄養摂取の欲求を満たす「母の乳房」[3)]、すなわち母親である。もっとも、母親が「初恋の対象」[4)]となるときには、すぐに子どもの心に「抑圧」[5)]が生まれるのだが、母親をその最初の対象に選ぶことはまさに「エディプス・コンプレックス」との関係で語られね

---

2) Kafka, Franz: Tagebücher Band 3: 1914-1923. In: Franz Kafka Gesammelte Werke in zwölf Bänden. Bd.11. Fischer Taschenbuch Verlag. Frankfurt am Main. 1994. S.101.

3) Freud, Sigmund: Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse Und Neue Folge. In: Sigmund Freud Studienausgabe. Bd.1. S. Fischer Verlag. Frankfurt am Main. 1969. S.324.

4) Ebd.

5) Ebd.

ばならない。エディプス王の悲劇とは、母親への性的欲望とライバルである父親への殺人願望からなるものであり、カフカの場合、母親との関係を調べる際に必ず行き着くのが、父親ヘルマンが家庭内で占める圧倒的な権力である。

フランツ・カフカとその父、ヘルマン・カフカとの確執はよく知られている。ヘルマンは、住民が百人にも満たないような南ボヘミアの小村、ウォシェクの屠殺屋の家庭に生まれ、そこで非常に貧しい少年時代を送った。しかし14歳になってウォシェクを去り行商人となってからは、少しずつだが経済的な成功を収める。そして軍隊勤務を終えてプラハに移り住んで後は、裕福な醸造業の娘だった妻ユーリエ・レーヴィの財産で装飾品店を始めたことを契機に、その商才を開花させた。[6]しかし、事業が成功し拡大していくにつれて、ヘルマンは仕事に忙殺されるようになった。この頃、カフカは父にはもちろんのこと、父にかかりきりの母にさえ、あまり相手をしてもらえない状況だったという。母は昼間のうちは父と使用人とのあいだに入って両者の調停役を果たし、夜になれば「いつも通りのトランプ遊び」で父の相手をしなければならないために、どちらにしても父の傍を離れることができなかったからである。[7]その当時の状況は、カフカが35歳のときに書いた『父への手紙』の中で詳細に語られている。それは文字通り父ヘルマンに宛てた手紙で、母ユーリエに預けて父に渡してくれるよう頼んだらしいが、内容を知ったユーリエが渡さずに保管したと言われている。そこでは父との関係がいかにしてこじれたのか、カフカなりにその原因がいろいろな角度から検証されている。

作家において、その作品の影響を両親から受けることは珍しいことではない。厳格な性格の弁護士であった父と社交的で音楽を愛する母をもつグリルパルツァー（Grillparzer, Franz: 1791-1872）、外科医で無神論者の父と文学好きでシラーを愛読する母をもつビューヒナー（Büchner, Georg: 1813-1837）、市参事会議員から副市長まで勤めた父とポルトガルの血を引

---

6) Vgl. Wagenbach, Klaus: Franz Kafka. Rowohlt Taschenbuch Verlag. Reinbek bei Hamburg. 1964. S.16-17.

7) Ebd. S.22

き音楽の才能のある母をもつマン（Mann, Thomas: 1875-1955）。どの例も両親がお互いに相反する性格を有している。そして子である作家は自己の内面に宿る二つの性格の狭間で苦しみ、文学作品を通じてそれを表出させ追及してゆく。特にマンの場合には顕著であったと言えよう。しかし、カフカには母親ユーリエ・レーヴィからの血が偏って多く入ったとしか言いようがない。カフカ自身も「簡潔に表現すれば、ぼくはカフカ家の背景をもった、レーヴィの人間です」[8]と認めている。彼はカフカ一族の特徴である「強さ、健康、食欲、声の大きさ、能弁さ、自己満足、世間に対する優越感、耐久力、沈着冷静、人間の機微への敏感さ、一種の太っ腹」[9]のうちどれ一つも有していない。最も身近にいながらも、その性質は対極にあるともいえる父親をもつカフカは、内面に他の作家とは大きく異なる葛藤を抱えることとなった。

「エディプス・コンプレックス」によって息子は母親を独占しようとし、同時に父の存在を邪魔に思うようになる。それまで無条件で受け容れてきた父親像にことあるごとに反抗し、その幻影から少しでも逃れようと躍起になる。カフカにとっては執筆活動そのものが幼少期から引きずり続けた父親に対する反発のための活動であった。「ぼくの文学活動や、それと関連のある、あなたにとってわけのわからぬものに対してあなたが抱いた嫌悪の情は、実に正当でした。事実ぼくはこの点において、あなたから離れたことで少しばかり自立していたのです」[10]。通常、「抑圧」が父親から息子へと行使されることで、息子は新たに「去勢コンプレックス」[11]に支配されるようになる。「去勢コンプレックス」は、息子が健康ならば「性格形成」[12]に、病気ならば「神経症」[13]に大きな役割を演じ、エディプスの

---

8) Kafka, Franz: Zur Frage der Gesetze und andere Schriften aus dem Nachlaß. In: Franz Kafka Gesammelte Werke in zwölf Bänden. Bd.7. Fischer Taschenbuch Verlag. Frankfurt am Main. 1994. S.12.

9) Ebd.

10) Ebd. S.46-47.

11) Freud, Sigmund: Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse Und Neue Folge. S.313.

12) Ebd.

二つの欲望、すなわち母親との近親相姦と父親殺しに対して「禁止の内在化」[14]を引き起こし、「服従による文化への参入と、欲望の動きを調節する掟の持ち主である父親への同一化」[15]を行使する。息子は「去勢不安」[16]が引き起こされた結果、「超自我」[17]を形成し、エディプス・コンプレックスから抜け出すことができるのである。しかし同時に、「性別のえこひいき」[18]はいかなることがあってもその存在を消すことはできない。上述の例はあくまで父親、母親、息子という三要素が揃って初めて成立するのであり、母親が自分の娘を息子と同じように育てても同じ結果は得られず、また、父親が母親と競合して息子の世話をしたとしても、息子にとって父親は母親と同様に重要な人物にはなりえない。[19]すなわち、息子が「エディプス・コンプレックス」を乗り越えるには、父親による「抑圧」だけでは不十分なのである。母親の息子に対する「ひいき」が父子間における絶妙な仲裁役を果たすことで、息子は葛藤の段階を乗り越えて父親に対する新たなパースペクティヴを手に入れることができるのだ。だがカフカ家の場合、少年期に誰もが経験するこの通過儀礼を経ることがなかった。その原因は父親の絶対的権力だけにあるとは言えない。同じくヘルマンの権力に屈していた母親レーヴィによる、少年カフカへの消極的な圧力がこれに拍車をかけた。子供であるカフカを守ることなく、間に立って父親の意向を伝えるだけの陰の命令者となっていたのである。[20]カフカは父親に反抗

---

13) Ebd.

14) ピエール・コフマン：『フロイト＆ラカン事典』、佐々木孝次監訳、弘文堂、1997年、20頁

15) 同上

16) 同上

17) 同上

18) Freud, Sigmund: Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse Und Neue Folge. S.328.

19) Ebd. S.327-328.

20)「母は、無意識ではあったが、狩りの中での勢子の役目を果たしていたのです」Ebd. S.28.「あなたから逃げようと思えば、家族からも、母からでさえも逃げなければなりませんでした。たしかに、母のもとではいつも守ってもらえましたが、しかしそれはあなたとの関係においてのみだったのです。（中

心を抱きながらも表だって反発することができず、またその意志の共有者として母親を頼ることもできず、その力のはけ口を見つけることができなかった。

我々は父親ヘルマンが持つ圧倒的な権力を、カフカの作品の中にはっきりと見いだすことができる。ここで『失踪者』の世界を紐解くこととしよう。少年カールは故郷のヨーロッパで女中を孕ませ、アメリカへ追放されるところから物語が始まる。それは女中ブルンマーに「誘惑」された性行為の結果であり、カールに全面的な責任があるとはいえないにもかかわらず、「養育費支払い」[21]や「自分たち自身に届くその他の醜聞」[22]を回避するために、両親はカールをニューヨークへと飛ばしてしまう。カールには弁解の機会も与えられず、またそれを当然のように受け容れているのか、弁解を試みる描写さえもない。また、ニューヨークに入港後に船室で火夫と出会い、彼の主張に同調して共に船長のもとへ向かうが、その船長にも父親の影が色濃くみられる。船長はカールの主張を受け容れることなく一蹴するが、それは「規律の問題が船長に任されているから」[23]だと言う。その際、カールは船内で伯父ヤーコプと出会い引き取られるが、同時に父親の権力も船長から伯父へとバトンタッチする。英語や乗馬のレッスンを伯父はカールに半ば強制的に課し、一日たりとも休むことを許さない。伯父の友人であるポランダー氏が自宅にカールを招待しようとすると、翌朝からの勉強のスケジュールが乱れることをおそれた伯父はこれに懸念の表情を見せる。それならその日の夜までならばよかろうと、ニューヨーク郊外にあるポランダー氏の邸宅へと向かうが、真夜中になった時点で伯父から別離の手紙を受け取り、またも追放されてしまう。ここでも弁解の機会さえ与えられない。その手紙において伯父ヤーコプは「私は完全に原則的な人間だ」「私は私のすべてを自らの原則に負っているのだ」[24]と自分を

略）母は年をとるにつれていっそう完全に、理性においてよりもむしろ感情において、あなたの判決と有罪宣告を受け容れました」Ebd. S.34.

21) Kafka, Franz: Der Verschollene. S.34.

22) Ebd.

23) Ebd. S.40.

24) Ebd. S.96-97.

評している。すなわち、権力は常に登場人物に内在化されており、その一つの面が船長としてまたは伯父として描かれ、カールの前に立ちはだかっている。そしてカールが「規律」「原則」からの逸脱を試みれば、それは権力への侵犯と受け取られ、即刻追放されてしまうのである。

紆余曲折の後に、カールはホテル・オクシデンタルでエレベーターボーイとして働きはじめる。しかし程なくしてロビンソン事件が起こり、門衛主任が突如登場して父親の権力を誇示する。つまり、カールはただ一度だけ、それも短時間持ち場を離れただけで、職務怠慢として即刻解雇されてしまうのである。そしてやはりカールの弁解は考慮されることなく一蹴される。エレベーターボーイにとって直属の上司はボーイ長なのだが、門衛主任の持つ権力はその出で立ちにもはっきりとあらわれている。「たくさん飾り付けられた豪華な制服—肩にも腕にも金色の鎖や帯が身をくねらすように巻きついていた—」[25]という描写が示す形姿はまさにその典型で、規律を顕在化させていると同時に、ホテル内で過度に組織化されたヒエラルヒーをも暗示している。また、それぞれの登場人物像はその地位が高ければ高いほど、それだけいっそう与えられる表現描写が少なくなる。[26]カールが雇われるときも、ロビンソン事件で解雇されるときも、ホテルの支配人は一切登場しない。真の権力者は物語の中では隠蔽されていて、その姿を現すことはない。肉体を与えられ顕在化する者は、比較的低い権力者に過ぎないのである。彼らに与えられたものは自由に振舞うことの許される個性ではなく、各々がもつ一定の権力を駆使して主人公を誘う機能のみであるが故に、「描かれた世界の中でのみ必然的」[27]であると言える。それゆえに登場人物の存在自体にはリアリティー、すなわち「真実」[28]も「現実」[29]も「人間らしさ」[30]も「自然さ」[31]も必要ない。カフカにとって絶

---

25) Ebd. S.172.

26) Vgl. Walser, Martin: Beschreibung einer Form. Carl Hanser Verlag. München. 1961 S.66.

27) Ebd. S.49.

28) Ebd.

29) Ebd.

30) Ebd.

対的な権力の裏には常に父ヘルマンの影があり、カールを有無を言わせず服従させる権力とはまさにその父権性であった。時を変え、場所を変えても姿を変えて追ってくる真の権力者は、カフカにとってまさに父ヘルマンの顔をもっていたはずである。しかし『失踪者』の作品世界において父ヘルマン自身を顕在化させるわけにはいかない。彼の父権性の一部を、各登場人物にその機能として割り当てるほかに方法はない。個性を持たず機能に終始するだけの低次の権力者はまだしも、真の権力者を舞台に上げて描写することが不可能だったのは、背景に以上のような理由が隠されていたからである。

2　父権的楽園からの脱却方法とその行き先

父権的規制から脱却するための方法は大きく分けて三つあると考えられる。第一は、結婚し自らが父となることで本来の父親から権力を奪い取り、父権性と一体化することで新たな規律を生み出す方法である。最も健全な方法で、カフカ自身も結婚のことを「最も鋭い自己解放と独立の保証」[32]と評し、結婚すれば「あなたと対等になり、古くそして永遠に新しくもあるすべての恥辱と暴政が単なる物語となるだろう」[33]と明言している。こうして手に入れた父親との「同格」[34]とは、前述のエディプス王に代表される「古い父親をその王座から追放する行為」[35]とは手段は違うものの、世代間抗争の結果という観点では等しい産物と言える。このように父親によって創られた子は、自分が新たな創造者にならぬかぎり抵抗をやめることはなく、子は自らが夫となり父となってはじめて、自分の父親との抗争を最後的に放棄するのである。[36]そしてまさに『失踪者』が執筆された

---

31) Ebd.

32) Kafka, Franz: Zur Frage der Gesetze und andere Schriften aus dem Nachlaß. S.59.

33) Ebd.

34) ミッシェル・カルージュ：『カフカ対カフカ』、金井裕訳、審美社、1970年、62頁

35) 同上

36) 同上

1912年は、カフカがフェリーツェ[37]と出会った運命の年でもあった。後に彼女と結んだ二度の婚約が両方とも破棄されたことは、カフカにとってこの手段がいかに机上の空論であったかを痛切に物語っている。皮肉なことに、そのことをまだ知らないはずの当時のカールでさえ、結婚はおろか、特定の女性と懇意になる機会はありながらも、その進展には恵まれない。

しかし、妻帯者となることは父権性を獲得するための制度に殉ずることであり、自らの独身性を犠牲にして初めて結婚は成立する。第二は、この独身を保ちながらも自らの命を絶つことで現世もろとも父権の範疇から逃避する方法である。父親の命に従って自殺する『判決』はまさにこの典型だが、受刑者の代わりに自ら進んで拷問機械に身をゆだねる『流刑地にて』、そして、何の罪かわからないまま裁判所によって刑を執行される『審判』など、カフカ作品の多くがこの方法に依拠している。この独身を貫いての自殺はどうやらカフカにとって、第一の方法、すなわち結婚し父権性と一体化する方法とは対を成す概念であったらしい。「独身主義と自殺は似た認識段階にある。自殺と殉教死は全く違うが、ひょっとすると結婚と殉教死はそうかもしれない」[38]というカフカのメモから読み取れることは「独身主義＝自殺≠殉教死＝結婚」の公式であり、物語の主人公にもこの公式を応用させたとみることができる。

第三は、ひたひたと追いかけてくる父権におびえながら、その代替としての新たな権力のもとに馳せ参じる方法である。まさに『失踪者』においてカールはこの方法を選択している。カールは頼るべき権力を持たないまま、新天地アメリカに送られてきた16歳の少年である。幸運にも船内で

---

37) Bauer, Felice(1887-1960)：ユダヤ人家庭に生まれる。速記タイピストを経て速記用録音機の製造会社に勤めていた。1912年にマックス・ブロートの家でカフカと出会い、頻繁な文通からの交際が始まる。1914年と1917年の2回にわたってカフカと婚約を取り交わすが、どちらも結婚までには至らずに解消。1919年に実業家と結婚し、スイス、それからアメリカへと移住して、その地で1960年に死去。

38) Kafka, Franz: Beim Bau der chinesischen Mauer und andere Schriften aus dem Nachlaß. In: Franz Kafka Gesammelte Werke in zwölf Bänden. Bd.6. Fischer Taschenbuch Verlag. Frankfurt am Main. 1994. S.178.

伯父に会ったことを皮切りに様々な人物の庇護のもとで生活を営むが、「規律」「原則」に違反してはそこから追放されてしまう。そしてまた自らを守ってくれる権力を求めて流浪を続けてゆくのである。伯父から逃れるようにして訪れたポランダー氏の邸宅でクラーラと逢うが、彼女はカールと部屋でじゃれあうときに男顔負けの体術を用いる。「うまく利用された押さえ込みでカールを掴み、見たことのない格闘技の足技で彼の足をブロックし、見事なまでに規則的な呼吸を保ちつつ彼を壁に押さえつけた」[39]のであり、まさにその「腕力」によってカールを追い回す父権から救済する可能性を感じさせる。一方、ホテル・オクシデンタルの調理主任は、普通ならなかなか手に入らないというエレベーターボーイの仕事をあっさりと紹介できるだけの「政治力」がある。しかもほぼ初対面と言ってよいカールのために、その場で決断できるほどの大きな政治力である。しかし上述したように、ポランダー氏の邸宅まで伯父の父権は伸び、ホテル・オクシデンタルでは門衛主任が父権の代行者となり、カールはその身を守ることに失敗する。そして最後に行き着くのが、でっぷりと太った、あまりに太っているために服も自分では着られないような、歌手ブルネルダのもとである。彼女の愛人となってすっかり羽振りのよくなったドラマルシュを見ればわかるように、ブルネルダは「経済力」の象徴と言える。家から出ることなく彼女の意思に従ってさえいれば、その経済力の傘下で安全は保障される。いかにカールがこの経済力の範囲内にその安息を見出したかは、断章として収録されているオクラホマ劇場の章で、「だれもが歓迎される」[40]と書かれた劇団要員募集のポスターに彼が飛びつく場面からも見てとれる。自分に差し迫ってくる父権に対抗できるだけの、そしてブルネルダのもつ経済力に匹敵するだけの権力を自ら獲得することができるならば、ブルネルダのもとを去ることも厭わないのである。

「世界はぼくにとって三つの部分に分かれました。第一は、奴隷であるぼくが、ぼくのためだけに考案され、そのうえなぜかはわからな

---

39) Kafka, Franz: Der Verschollene. S.73.

40) Ebd. S.295.

いけれども、一度も完全には従うことのできないような法の下で暮らしている世界。第二は、ぼくの世界からは果てしなく隔たっていて、あなたが生き、統治し、命令を出し、その命令が遵守されないために腹を立てている世界。そして最後の第三の世界では、他の人々が幸福そうに、命令と服従から自由になって暮らしているのです」[41)]

この『父への手紙』においてカフカが父ヘルマンに訴えている「一度も完全には従うことのできないような法」とは、まさしく父の「命令」である。『失踪者』においては、船長が持っている「規律」であり、伯父の持つ「原則」である。カールはヨーロッパを追放されたあと、新天地アメリカを「第三の世界」と考えた。が、それは早合点に過ぎず、父権性の支配する世界がことあるごとに迫ってくる。カールは次々に出会う男性、すなわち船長、伯父、ポランダー氏に庇護を求めるが、希望は叶わない。次いで女性のもつある種の権力にすがろうとする。男性である自分には解決できない諸々の問題に対して、救済の手を差し伸べてくれる存在としての女性。生への愛と渇望を授けてくれる女性。腕力のクラーラ、政治力の調理主任、そして経済力のブルネルダ。男性から始まって女性へと移り変わるこの登場人物の順は必然である。カールは自分で相手を選択することは一度もない。行く先々で出会った人物に引き込まれる。このことは、個々の人物には前もって特定の機能が割り振られていて、カールにある決まった影響を及ぼすよう運命づけられていることを意味している。その証拠に、カールが父権の代行者たちが掲げる「規律」「原則」に違反したとき、代行者たちはカールを追放し、自らの権力範囲を越えて離れてゆくカールに対してその役割を終える。彼らは「主人公に対する機能から外されたとき、その特徴を本質的に失わざるを得ない」[42)]のである。伯父もポランダー氏もカールを放逐はしても追跡することはない。自らの権力の範疇内において「規律」「原則」に従わせることが彼らの性質であり、カールを保護することが第一の目的ではないからである。女性たちに限ればその現象はさ

---

41) Kafka, Franz: Zur Frage der Gesetze und andere Schriften aus dem Nachlaß. S.20.
42) Vgl. Walser, Martin: Beschreibung einer Form. S.81.

らに顕著となる。クラーラはポランダー氏の邸宅でのみ、調理主任はホテル・オクシデンタルでのみ、ブルネルダは自らの家においてのみ、その権力を行使できる。ドゥルーズの言を借りれば、外にある父権性社会との境界に位置している「蝶番」[43]の役目を果たしているだけではない。境界線を含み、その内側全てが女性権力の有効範囲である。父権性社会によって構成される物語の筋を樹木とすれば、その「樹木の枝や根の一片がリゾームとして発芽」[44]したものがまさに権力を有する女性たちであり、父権性社会の設計図からは独立している。したがって、父権性から逃げ惑うカールの目には絶好の避難場所に映るのであろう。リゾーム化によって彼女たちは「根に侵入してそれらの根と連結され、それらを奇妙で新たな用途に役立てることも辞さない茎や繊条」[45]となり、一本に統一された父権という名の樹木の生長プロセスには従うことなく、父権の届かない独自の次元に存在することができるからである。しかし、彼女たちの役割はその樹木からの独立性を生かして権力に対立することではなく、本質的に権力そのものに「《接触》し、《関係》があり、それらに《隣接》して」[46]いるだけなのである。

そのようなある種の権力をもつ女性たちには一つの共通した特徴がある。それは男性を引き寄せるエロティックな描写に起因する娼婦のイメージに他ならない。女性たちが醸し出すエロス、そして救済の愛の手とは、「すべてに行き渡った、権力と暴力に基づいた社会組織の反映、確認」[47]に過ぎないのだろうか。腕力も政治力も経済力も、女性というよりはむしろ男性権力の象徴といえる。もしそうだとすれば、女性たちの存在は男性社会の権力構造の代理に過ぎないことを肯定することになってしまう。カフカ

---

43) G・ドゥルーズ/F・ガタリ：『カフカ—マイナー文学のために』、宇波彰/岩田行一訳、法政大学出版局、1978年、130頁

44) G・ドゥルーズ/F・ガタリ：『千のプラトー』、宇野邦一/小沢秋広/田中敏彦/豊崎光一/宮林寛/守中高明訳、河出書房新社、1994年、27頁

45) 同上、28頁

46) G・ドゥルーズ/F・ガタリ：『カフカ—マイナー文学のために』、130頁

47) Vgl. Emrich, Wilhelm: Franz Kafka. Athenäum Verlag. Frankfurt am Main. 1957. S.243.

が女性に対して期待した役割は、別のところにあったのではないか。

3　娼婦性と女性のもつ権力

歴史的に女性観というのはどのように推移していたのであろうか。『失踪者』が執筆された20世紀初頭はちょうど女性概念の転換期にあたっていたのだが、ここではやや時代を遡ってドイツを例に概観してゆく。18世紀末期から19世紀中期まで、フィヒテ（Fichte, Johann Gottlieb: 1762-1814）が「近代的理性と女性の無権利状態」[48]を結びつけた影響もあり、「公領域」[49]つまり政治的・社会的・経済的活動は男性の手に委ねられ、それに対し女性は家庭という「私領域」[50]のみを割り当てられ、両性の性格規定が定着していた。それに対し、1960年代には女性性に男性性と対等の価値を認め、私領域のみならず公領域にも女性はその影響を及ぼすべきだという考え方が興った。母性的素質の発揮は男性には代替不可能なものであり、それを出産と育児を表す「身体的母性」[51]と区別してシュラーダー＝ブライマン（Schrader-Breymann, Henriette: 1827-1899）は「精神的母性」[52]と表現した。この「精神的母性」論が運動の立脚点となって1894年には「ドイツ婦人団体連合（BDF）」[53]が結成され、女性が医療や社会福祉、教育など女性精神の要求される分野で活躍するためには、「私領域」を逸脱し「公領域」へと進出していかねばならないと主張された。1890年代に入るとドイツでは工業化が一層進展して安価な女性労働力への需要が高まり、工業部門に就業する女性の数は1882年には113万人だったの

---

48) 姫岡とし子：『近代ドイツの母性主義フェミニズム』、勁草書房、1993年、23頁
フィヒテによれば「すべての人間は生まれながらに自由」でありながらも、「妻は女性にのみ備わる本能的で自発的な愛」によって「夫に服従」し、「財産の所有権も市民権もすべて夫に委ねる」という。

49) 同上、22頁

50) 同上

51) 同上、25頁

52) 同上

53) 同上、35頁

に対し、1907年には210万人にまで増加している。[54]しかし、こうして女性が経済的に自立することはフェミニズム運動の中で必ずしも肯定的に受け止められた訳ではなかった。男性世界である工場労働では「女の特性」[55]が破壊されると考えられたからである。また1900年代初頭には、対外的に強力な国家の建設のために「家族の社会・国家秩序への統合」[56]が急務の課題として挙げられる。そうした潮流の中、家族における教育者の役割を担っていた女性の国家への統合が推進され、女性たちは国民としての自覚のもとに社会と国家の積極的な担い手になる機会をもつに至ったのである。折しも1914年から始まる第一次世界大戦に向けて、ナショナリズムの波が高揚しつつあった。女性を国家へ統合する動きと、開戦が近づくにつれて芽生えた愛国心や帰属意識が相まって、例えば上述の「ドイツ婦人団体連合」は「婦人祖国奉仕団（NFD）」[57]を結成し、積極的に戦時体制に組み込まれることとなる。この第一次世界大戦こそが世界で初めての人海戦であり物量戦であり、国家を挙げての総力戦であった。そのため短期戦を期待していた交戦国は、軍需産業と消費生活の両面で銃後の守りに女性たちの協力を仰ぐことになる。例えばフランスでは800万人、ドイツでは1300万人[58]といった数の男性が戦争に動員され、長期戦になればなるほど就業者不足による経済活動の停滞が深刻化してきたからである。金属工業、電力業、化学工業など、戦争に直結していてそれまで男性の仕事とされていたものの多くが、女性の手に渡った。1917年7月の時点で、軍隊に招集された人員の代わりとして就業した人のうち、6割以上が女性で占められていたのである。[59]この労働における女性の解放は当然の帰結として女性の「男性化」[60]を招いた。すなわち、カールが追い求める「腕

---

54) 同上、36頁
55) 同上、38頁
56) 同上、96頁
57) 同上、115頁
58) ジョルジュ・デュビィ/ミシェル・ペロー監修：『女の歴史Ⅴ』二十世紀1、杉村和子/志賀亮一監訳、藤原書店、1998年、57頁
59) 姫岡とし子：『近代ドイツの母性主義フェミニズム』、119頁
60) ジョルジュ・デュビィ/ミシェル・ペロー監修：『女の歴史Ⅴ』二十世紀1、

力」と「政治力」と「経済力」を兼ね備えた女性、つまり、代理としての父権者が誕生していたのかもしれない。皮肉にも戦争によって女性を抑圧する伝統や因襲が打破され、女性解放の一つの契機を得たのである。

だが、『失踪者』をこのような女性史の観点からのみ論じ、登場する数々の女性たちは時代潮流の映写に過ぎないと断ずることは、あまりに拙速であろう。女性の権力とは単に矮小化された男性の権力ではない。もし「腕力」と「政治力」と「経済力」の傘下でのみカールを保護したいのであれば、わざわざ代理としての父権者を登場させることなどせずに、一貫して男性の保護者を登場させることが可能だからである。それにもかかわらず物語の後半になるにつれて、権力者としての女性が順にカールの前に現れることには大きな理由が隠されている。そこには必ず女性にしか持ち得ない力が存在しているのである。ここで着目すべきはカフカが女性に対して用いるエロティックな描写である。父の友人のグリーン氏によって「あごの下をつかまれ」ながらも「されるままにして目を閉じる」[61]クラーラ、ボーイ長が「ぴったりすぐうしろに立ち、少しばかり反り返っていた、小さく控えめなレースの襟をゆっくりと整える」[62]のに身を任せる調理主任、そして、「赤い服の裾は少しばかりめくれて」「足はほとんど膝まで見えている」[63]ブルネルダ。彼女たちにはエロチズムを何らかの代価と交換する娼婦の香りが漂っている。特にブルネルダにいたっては、カールが初めて彼女を認識したとき視界に入ったのは「顔を振り向けたときに一緒に波うった彼女の二重のあご」[64]だけであることからも、決して美形とはいえない容姿である。それにもかかわらず、ロビンソンをして「なめてきれいにしてしまいたい」「飲み干してしまいたい」[65]と言わせるだけの魅力を放っている。居丈高だと思えば従順になり、男性であるドラマルシ

---

65 頁

61) Kafka, Franz: Der Verschollene. S.68.

62) Ebd. S.188.

63) Ebd. S.225.

64) Ebd. S.226.

65) Ebd. S.234.

ュに対して感情的に、ときにはその性的魅力でもって彼に奉仕する。これはまさに男性が知性、精神、自律的な意志をその象徴とするのに対する、肉体性、官能性、従属性の表出であり、「男性化」した女性というよりは、まさに娼婦の姿をした女性そのものと考えられる。

ところで、カフカ自身が娼婦について触れている箇所は少なくとも二箇所ある。1908年9月に親友マックス・ブロートに宛てた手紙と、1913年11月の日記の中においてである。とくに後者は『失踪者』の執筆時期と近く、その描写がブルネルダをたやすく連想させるものなので、ここに引用する。

> 「ぼくはわざと娼婦たちのいる路地を通りました。彼女たちの前を通り過ぎてゆくことはぼくの欲望をそそるのです。彼女たちのうちの一人とともに歩くということは、遠いけれども、ともかく可能性として起こりうることです。そうしたことは卑劣なことでしょうか？しかしぼくはそれよりもよいことを知りませんし、それを実行することは本質的に罪のないことのように思われ、またぼくを後悔させることもほとんどないのです。時代遅れだけれど、いろいろな飾りをつけることによってある意味では華麗とも言える服を着た、太った年増だけがぼくの好みなのです」[66]

驚くべきことは、娼婦たちとの交際に関して、カフカ自身が「罪はない」「後悔しない」と肯定的に考えていることだ。このことは、女中を孕ませたカールを「罪なき者」としている彼の見解と一致する。が、同時に、この主張はカフカの残した日記や手紙の他の部分とは相容れない。[67]さらに、

---

66) Kafka, Franz: Tagebücher. Band2: 1912-1914. In: Franz Kafka Gesammelte Werke in zwölf Bänden. Bd.10. Fischer Taschenbuch Verlag. Frankfurt am Main. 1994. S.203-204.

67)「一緒にいることの幸福の罰としての性交。できるだけ禁欲的に生活すること、若人よりも禁欲的に、それがぼくにとって結婚生活に耐えるための唯一の可能性なのです」Ebd. S.188. など

ユダヤ教の聖典である旧約聖書では、人は当然結婚するものだという前提に立って数々の物語が語られている。[68]フェリーツェ・バウアーとの結婚に関しても、女性と性的関係をもたなくてはならないという義務感が根底にあったため、カフカはあれほどまでにもがき苦しんだと考えられる。「この昼間の世界とあの《ベッドの中の30分》との間」[69]には「乗り越えることのできない深淵」[70]があると断じ、性的行為を「魔術」[71]とまで表現している彼が、正反対のベクトルを向いている娼婦の存在を容認することは、いささかその整合性に疑問を持たずにはいられない。おそらく、カフカはその実生活の中では性的関係において過度に潔癖であったと思われるが、物語世界の中にその性格を持ち込むことはなかったのであろう。むしろ、作品中の娼婦らしき人物にカフカは女性の象徴としての役割を担わせているのであるから、素直に登場人物の機能性のみに着目すれば、彼女らは「家族・結婚生活・官僚制のあらゆる機械が交叉するところ」[72]に登場する道しるべに過ぎないことが見えてくる。

女性たちが作品の中の一機能としてのみカフカに命を与えられたことは明白である。しかし、彼女たちは男性主人公を招き寄せているのか、それとも拒絶しているのか、その境界は非常に曖昧と言える。それは娼婦という存在そのものに、男性を惹きつける力と、だからと言って最終的に結ばれることは予め拒否するという、矛盾した力が秘められているからである。そのうえ、カフカの精神の土台でありそれゆえ反発の最初の対象でもあったユダヤ教においても、女性に関しては解釈が二つに分かれている。いたって禁欲的な文献の中では、女性は「敬虔なカバラ学者を聖なる考えから

---

68)「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。こういうわけで、男は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる」(創世記2·24)、「妻を得る者は、良き物を得る、かつ主から恵みを与えられる」(箴言18·22) など。どちらも日本聖書協会による口語訳より抜粋。

69) Kafka, Franz: Briefe an Milena. Erweiterte und neu geordnete Ausgabe. S. Fischer Verlag GmbH. Frankfurt am Main. 1983. S.202.

70) Ebd.

71) Ebd. S.203

72) G・ドゥルーズ/F・ガタリ：『カフカ—マイナー文学のために』、134頁

そらし、突如わき起こった欲望を求めさせ、それどころか彼を夢の中で追い回し、その結果望まないのに、彼を汚す夢精を引き起こす誘惑者」[73]としか認められていない。仮にこの解釈を尊重すれば、カールはクラーラ、調理主任、ブルネルダのもつ各種権力の庇護を求めるものの、それは彼女たちからの誘惑にその身を任せているに過ぎないことになる。カールは救済されない。それどころか、カフカの日記を見ると「ぼくは両親から生まれたのだし、両親や妹たちとは血において結びついており、（中略）ときにはぼくもこの血に憎しみを浴びせます。自宅にある夫婦のベッドや、使われたシーツやカバー、きちょうめんに置かれたシャツを目にすると、ぼくは苛立ちのあまり反吐が出るほどの気分になりうるのです」[74]と書かれている。ここには「性の恐怖と市民の性的儀式に対する恐怖」[75]だけではなく、「肉による生誕の恐怖」[76]さえも感じられ、結婚による性的結合をむしろ聖なるものと考えるキリスト教とは相容れない思想が垣間見える。

しかしもう一つ、東欧における少なからぬ敬虔なユダヤ人には、女性の誘惑を非常に重要で良いものだとみなす解釈もあった。贖罪者の「より高い段階」[77]に達しようとする者は、まずは「罪業の領域」[78]に赴かねばならず、それからはじめて贖罪することができると彼らは考えた。「罪業の領域」とは性的なものも含んだ女性との関係を指している。男性に向けられたこの「性的な誘惑」[79]がまさに救いをもたらす力をもっていて、罪業によって、すなわち女性とのこのような関係によって、神聖さの中における「より高い段階」へ達することができると断じている。カフカは東欧ユダヤ人に属していることから考えても、女性に関して後者のごとく解釈し

---

73) Vgl. Grözinger, Karl-Erich: Kafka und die Kabbala: das Jüdische in Werk und Denken von Franz Kafka. Eichborn Verlag. Frankfurt am Main. 1992. S.93.

74) Kafka, Franz: Tagebücher Band 3: 1914-1923. S.140.

75) ミッシェル・カルージュ：『カフカ対カフカ』、62 頁

76) 同上

77) Vgl. Grözinger, Karl-Erich: Kafka und die Kabbala: das Jüdische in Werk und Denken von Franz Kafka. S.95.

78) Ebd.

79) Ebd. S.95-96.

ていたのではないだろうか。「より高い段階」とはカールの場合、父権性に脅かされることなくアメリカで生を営むことである。そしてカフカ自身の場合、父親ヘルマンの恐怖から脱却し、彼の「命令」を拒み続けることである。この一度堕ちる過程を経て初めて救済されるという思想は、例えばカフカがミレナ[80]に書き残した手紙の以下の部分にも見受けられる。

> 「不潔なのです、私は。ミレナ、果てしなく不潔なのです。それゆえに純潔さをもってそのように叫ぶのです。最も深い地獄にいる者たちほど純潔に歌う人はいません。我々が天使の歌声だとみなしているものは、そのような者たちの歌声なのです」

つまりこの「不潔」は、「性的な誘惑」によって導かれる「罪業の領域」、すなわち「最も深い地獄」において身に付くもので、そこで「不潔」になって初めて「より高い段階」へと進むことが可能となる。真の権力である父権性から逃避し続け、女性性の下での救済を望むカールだけでなく、ヨーゼフ・KやKまでもが眼前に現れる女性たちに躊躇することなく身を任せてはその「不潔」の中で溺れていくのは、「不潔」となることで「より高い段階」へ救済されることを願っているからに違いあるまい。女性のもつ性的な魅力は男性を貶めるためにあるのではなく、まさに神聖な世界へ向かう救済の道しるべなのではないだろうか。

4　おわりに

本論ではカフカがもっていたであろう女性観と、彼が作品中で女性たちに与えてきた機能について考察してきた。主人公の役割が、常に物語の中

---

80) Jesenska, Milena(1896-1944)：プラハ生まれのチェコ人で、ユダヤ人の夫をもつ。カフカの作品をチェコ語に翻訳したいと思い、1919年に本人に会ったことが交際のきっかけとなった。文学的好奇心が非常に強く、カフカの作品、そして彼自身の良き理解者となる。後に、カフカからまさにこの『失踪者』の原稿を受け取るが、ユダヤ人の擁護運動に参加したことで強制収容所へ送られて他界する。

81) Kafka, Franz: Briefe an Milena. S.228.

心に立ち、それを積極的に進行させることだとすれば、『失踪者』においてカール・ロスマンは主人公失格だろう。なぜなら、彼は入れ替わり立ち替わりに眼前に現れる何人もの女性に誘惑されるが、ときに導かれ、ときに拒絶され、彼はひたすら受動的に範囲限定された筋の上を浮遊しているに過ぎないからである。作品全般を通してカールは父権の影から逃れ続け、ときに「腕力」、ときに「政治力」、そしてまたときには「経済力」に姿を変えた、女性のもつ権力にすがろうとする。一方、彼女らはその「性的な誘惑」でもって贖罪者である男性を救済しようと試みる。ところで、断章「オクラホマの野外劇場」[82]でカールが目にするのは「白いショールを巻き、背中には大きな翼をつけた、天使のような何百人もの女性たち」[83]であり、劇団要員の採用事務所は彼女たちの扮する天使の台座の後ろにあり、人々の集まる前方からは見ることができない。[84]ここで女性たちは晴れて救済の天使そのものとなり、同時に、男性たちを採用する企業、すなわち権力者として堂々と顕在化する。このように、断章に至るまで父権性と女性性の機能を細密に構築しきっている『失踪者』の世界においては、カールは庇護と追放を繰り返されながら永遠に放浪せざるをえないのである。カフカが未完のまま筆を置いたのも理解できる。むしろ、結婚し自らが父親になって父権を発動する、もしくは独身のまま自殺することで父権からの脱却を目論むより、延々と父権に追われる身であり続けるほうが、はるかに困難で、その分我々読者にとってもリアリティーに富み、納得のいく展開であるとは言えないだろうか。この点において『失踪者』は、『審判』そして『城』へと続く長編小説の中の、単なる序章の地位に甘んじているべきではないのである。

（慶應義塾大学大学院後期博士課程在学中）

---

82) マックス・ブロートは未完のこの章を『失踪者』における最終章だと確信していた。

83) Kafka, Franz: Der Verschollene. S.297.

84) Vgl. Emrich, Wilhelm: Franz Kafka. S.250.

Funktion der Frauen in Kafkas Werken
Eine Re-Lektüre von „Der Verschollene“

TERADA, Yusuke

In Kafkas Werken findet sich eine große Anzahl von Frauen, die die Helden verführen. Welche wichtige Rolle wollte Kafka sie spielen lassen? Und warum konnten nur sie diese Rolle übernehmen? Zur Annäherung an eine Antwort wird in der vorliegenden Arbeit das Frauenbild in Kafkas Roman „Der Verschollene“ untersucht. Im Vergleich mit den künftigen Helden, Josef K. und K, die allmählich ihre Namen verlieren und sich symbolisieren, ist Karl Roßmann in „Der Verschollene“ der Aufrichtigste und - mit den Worten Kafkas - „der Schuldlose“. Aber eben deshalb hat Karl fast keine Möglichkeit, sich seiner inneren Kraft zu überlassen. Seine Aktionen werden immer von äußerer Macht bestimmt, und die Fabel, die ihn umgibt, läuft unausweichlich weiter. Karl ist seiner Umwelt gegenüber stets passiv. Damit ist Karl in „Der Verschollene“ die geeignete Figur, um die beeinflussende Kraft zu untersuchen, die die Frauen im Umfeld des Helden haben.

Das Frauenbild eines Mannes und sein Interesse am anderen Geschlecht werden in seiner Kindheit von der Mutter geprägt. Betrachtet man aber die Beziehung zwischen Kafka und seiner Mutter, so muss die überwältigende Macht berücksichtigt werden, die sein Vater Hermann Kafka im häuslichen Kreis besaß. Der Theorie des „Ödipuskomplex“ zufolge versucht ein Sohn seine Mutter zu monopolisieren und behandelt seinen Vater als lästigen Eindringling. Durch „Regungen“ des Vaters empfindet der Sohn „Kastrationsangst“, kann in der Folge ein „Über-Ich“ bilden und dem „Ödipuskomplex“ entkommen. Dabei wird jedoch die Kombination der drei Elemente Vater, Mutter und Sohn vorausgesetzt. Im

Falle Kafkas kam es nicht zu dieser Lebenszeremonie: wohl nicht nur aufgrund der absoluten, überwältigenden Macht seines Vaters, sondern auch, weil sich seine Mutter Löwy ebenfalls der Macht Hermanns unterwarf, ihren Sohn nicht vor ihrem Mann schützte und als Befehlende, die zwischen zwei Männern vermittelte und ihrem Sohn nur die Position ihres Mannes übermittelte, in Hermanns Schatten stand.

Die überwältigende Macht von Kafkas Vater wird in „Der Verschollene“ deutlich sichtbar. Nach dem Einlaufen in New York treffen Karl und der Heizer den Kapitän des Schiffs, der auch an Hermann erinnert. Bei diesem Treffen lehnt der Kapitän Karls Forderung ab, weil „eine Sache der Disciplin hier der Beurteilung des Herrn Kapitäns unterliegt“. Als Karl dort seinem Onkel Jakob begegnet und herzlich aufgenommen wird, scheint gleichzeitig das überwältigende Vaterrecht vom Kapitän auf den Onkel übertragen zu werden. Bei einer Einladung in das Landhaus Herrn Pollunders bekommt Karl den Abschiedsbrief seines Onkels und wird damit wieder ausgeschlossen. In diesem Brief beschreibt sich der Onkel folgendermaßen: „ich bin durchaus ein Mann von Principien“ „ich verdanke meinen Principien alles was ich bin“. Das heißt, das Vaterrecht ist immer den auftretenden Personen immanent, die eine Seite als Kapitän beschrieben und als Onkel, und steht vor Karl. Wenn dieser von der „Disciplin“ oder dem „Princip“ abzuweichen versucht, hält man es für einen Machtbruch, und er wird sofort verbannt. Daneben ist in der Szene des Hotels Occidental zu bemerken, dass die Personen desto weniger beschrieben werden, je höher sie stehen. Weder als Karl in Dienst genommen wird, noch als er infolge des Falls Robinson wieder entlassen wird, tritt ein Hoteldirektor auf: In der Erzählung wird der wahre Machthaber verborgen, er erscheint nicht. Die Personen, die körperlich offenbar werden, sind lediglich niedrigere Machthaber. Für Kafka existiert hinter der überwältigenden Macht immer der Schatten Hermanns. Die Macht, die Karl jederzeit und überall in unterschiedlicher Gestalt verfolgt und ihn ohne weitere Umstände zum Gehorsam bringt, ist das Vaterrecht.

Um sich von der Disziplin des Vaterrechts zu befreien, sind drei Methoden denkbar. Erstens: Durch Heirat und eigene Vaterschaft dem Vater die Macht zu

entziehen und durch die Vereinigung mit dem Vaterrecht eine neue Disziplin hervorzubringen. Der Sohn beendet den Konflikt mit seinem Vater erst dann, wenn er selbst Vater wird. Zweitens: Ledig bleibend das eigene Leben hinzugeben und mit dieser Weltflucht auch vor dem Kreis des Vaterrechts zu fliehen. „Das Urteil", in dem der Held sich dem Befehl seines Vaters entsprechend tötet, ist nicht das einzige Beispiel für diese Methode. Sie findet sich in zahlreichen Werken Kafkas, wie „Der Prozeß" oder „In der Strafkolonie". Drittens: Sich aus der Verfolgung durch das Vaterrecht, zugleich dem wahren Gewalthaber, einer alternativen, neuen Macht unterzuordnen. In „Der Verschollene" wählt Karl diese dritten Methode. Bei Herrn Pollunder trifft er Klara, die ihn mit männlicher Kampfkunst bezwingt, als sie sich zusammen in ihrem Zimmer vergnügen. Dies lässt sich interpretieren als Rettung mit „kräftiger Macht" vor dem Vaterrecht, das ihn verfolgt, „Politische Macht" hat die Oberköchin im Hotel Occidental, mit der sie Karl auf leichte Weise die sonst nicht einfach zu erhaltende Arbeit des Liftjungen vermittelt. Am Ende kommt er zu der Sängerin Brunelda. Sie ist das Symbol „ökonomischer Macht", sichtbar an Delamarche, der als ihr Geliebter an Einfluss gewinnt.

„Kräftige Macht", „politische Macht" und „ökonomische Macht" können eher als Symbole männlicher denn weiblicher Macht betrachtet werden. Doch die erwähnten Frauen haben ein weiteres charakteristisches Merkmal gemeinsam: Den Duft der Dirne, die Erotik gegen irgendeine Art der Bezahlung tauscht. Dies ist der Ausdruck von weiblicher Körperlichkeit, Sinnlichkeit und Abhängigkeit, männlicher Intelligenz, Geistigkeit und Selbständigkeit gegenübergestellt. Kafka scheint diese Anziehungskraft der Dirne für eine wichtige Funktion gehalten zu haben, die nur Frauen haben können. Auch im Judentum, der geistigen Grundlage Kafkas und dem ersten Gegenstand seiner Ablehnung, wurden Frauen auf zwei Arten beurteilt. In der außerordentlich asketischen Literatur wurde die Frau nur betrachtet als „Verführerin, welche den frommen Kabbalisten von seinen heiligen Gedanken ablenkt". Doch bei manchen frommen Juden in Osteuropa gab es auch die Auffassung, die Verführung von Frauen als unentbehrlich und positiv anzusehen: Jeder, der zur „höheren Stufe des Büßers" gelangen wolle, müsse sich

zunächst in den „Bereich der Sünde“ begeben, erst dann könne er seine Sühne leisten. Der „Bereich der Sünde“ deutet auf das Verhältnis zu Frauen auch im sexuellen Bereich hin. Hat die sexuelle Verführung, die auf die Männer gerichtet ist, die Macht, sie zu erlösen, und können sie durch die „Sünde“, das heißt durch ein solches Verhältnis zu den Frauen, die „höhere Stufe“ der Heiligkeit erreichen? Die „höhere Stufe“ bedeutet bei Karl, friedlich in Amerika zu leben, ohne Bedrohung durch das Vaterrecht. Und im Falle von Kafka selbst war dies, sich von der Furcht vor seinem Vater Hermann zu befreien und weiterhin seinen „Befehl“ abzulehnen. Für Kafka existierte der weibliche sexuelle Zauber nicht, um die Männer zu erniedrigen, sondern als Wegweiser der Erlösung, gerichtet auf eine heiligere Welt.